

## モーツァルトの作品

### カッサシオン K.63

「カッサシオン」の語源は諸説あるが、内容的にはディヴェルティメントやセレナードと同種の機会音楽である。モーツァルトのカッサシオンは3曲あり、このト長調はおそらく1769年ザルツブルクの作と推定される。カッサシオンでは「行進曲」が不可欠な要素となっており、本曲も第1楽章の明るい行進曲で始まる。実質的な楽章は第2楽章の躍動的なアレグロからで、弦楽のみで奏されるアンダンテの第3楽章、第4楽章の一つ目のメヌエットを経て、第5楽章ではヴァイオリン独奏が甘美な旋律を協奏曲風に歌う。第6楽章は二つ目のメヌエットで、ハ長調のトリオが愛らしい。そして最終楽章フィナーレは、アレグロ・アッサイのロンドで軽快に曲を閉じる。

### 2つのヴァイオリンのためのコンチェルトーネ

1774年、モーツァルト18歳の頃の作品。自筆譜には「コンチェルトーネ」とのみ記されている。これはオーストリアから北イタリアで流行した呼称で、2名以上の独奏者を要する協奏曲というほどの意味である(しかし、この曲名で残っているのは、本作くらいしかない)。独奏楽器としては2つのヴァイオリンがメインだが、全曲を通じてオーボエ、後半の楽章ではチェロも活躍する。第1・第2楽章にはモーツァルト自筆のカデンツァが置かれ、終楽章はトリオ付きメヌエットの長大なフィナーレ。モーツァルトにとっても自信作だったらしく、独奏楽器に派手な名人芸が要求されるわけではないが、素朴で優美な旋律を堪能できる作品となっている。

### ディヴェルティメント 第17番

作曲は1779年後半と推測される。モーツァルトのディヴェルティメントのなかでも人気の作品で、特に第3楽章は“モーツァルトのメヌエット”の愛称で親しまれている。6つの楽章から構成され、2本のホルンと弦楽器という編成。短い序奏のあと、ヴァイオリンが沸き立つように奏でる第1楽章は、ソナタ形式のアレグロ。リズム豊かな楽想は第2主題にも引き継がれる。第2楽章はアンダンテで、16小節の主題と6つの変奏からなる。厳粛な雰囲気をもたせたニ短調で、変奏が進むごとに哀感が増すが、第4変奏の大らかなホルンの二重奏が安らぎをもたらす。第3楽章は優雅なメヌエット。中間部のトリオではヴァイオリンの華やかなトリルが聴きどころ。第4楽章はゆったりしたアダージョ。ヴァイオリンが抒情的に歌うが、ほのかな哀愁が全体を覆っている(ホルンは沈黙)。第5楽章のメヌエットでは、華やぎが戻ってくるものの、時折、哀切な表情が挟み込まれる。軽快なロンド主題の第6楽章はアレグロ。朗らかに突き抜ける“歌”が魅力的。不思議な哀愁と明るい曲想の混じり合いが、このディヴェルティメントを人気作にしているのかもしれない。